

特別助成 東日本大震災復興関連のコミュニティ支援事業

「被災地の子ども達の育成プロジェクト」事業

東日本大震災の被災児童や被災地の支援と 若者対象の防災教室を実施

東日本大震災から7年。今も被災地には惨禍の爪痕が残り、心が傷ついたままの子どもたちがいて、疲弊したコミュニティがある。神奈川県大和市を拠点に、被災地や被災した子どもたちの支援を続けるとともに、震災の経験を学ぶことで防災に役立ててほしいと若者を対象に防災教育に取り組むボランティア団体がある。



多数の高校生が参加した「宮城県被災地防災研修」



震災当時の様子を語る住民と話を聞く高校生たち

支援の網の目からこぼれた住民を支援しながら 神奈川県の若者への防災教育に取り組む

阪神淡路大震災後に地域でのネットワークの必要性を感じ、1999年に立ち上げたという「一般社団法人やまと災害ボランティアネットワーク」(以下、YSV)では現在、幼児から大学生などへの福祉と防災を組み合わせた福祉防災教育、被災児童・被災孤児・高校生語り部などの支援、被災地へのボランティアバス運行、ボランティアの派遣・コーディネートなどの活動を展開している。

東日本大震災後は、被災した子どもたちの支援活動やコミュニティ支援活動などを通して継続して被災地との関わりを続けているが、「被災地では公的であれ、民間であれ、様々な支援が行われていますが、そうした支援の網の目からこぼれた方々があります。そうした方々、特に子どもたちを応援しているんだよという気持ちを伝えるために活動

を続けています」と、YSVの代表理事の市原信行さんは、活動の根底にある思いをそう話す。

震災直後、被災地支援に出かけた市原さんは、そのまま被災者と一緒に避難所で半年間、生活をともにし、さらに2013年まで仮設住宅やアパートで暮らした経験を持つ。そのなかで、ボランティアとして来た兵庫県立舞子高校環境防災科の生徒たちが、宮城県東松島市野蒜地区の被災したお寺の墓所を埋め尽くした土砂を黙々と取り除き、骨を拾い集める作業を目の当たりにし、地元の神奈川県でもこうした高校生たちを育てたいという思いで、福祉防災教育活動に力を入れるようになった。「ボランティアや支援活動に取り組んでいるのは年輩の方々が多く、尻すばみになりがち。子どもたちに現地の情報を発信して、一緒に仲間として活動してもらえれば将来的に効果的」という思いもあるという。

被災地防災研修や児童養護施設の支援で 防災やボランティアに対する意識向上を図る

こうした活動の一環として実施した事業にAJOSCの助成が役立てられているが、その一つが、高校生を参加対象にして、2017年8月7日～9日に行った「宮城県被災地防災研修」である。これは2012年から毎年行なっているもので、今回は神奈川県内を中心に静岡、京都、熊本、千葉の高校生35名が参加した。7月22日に事前説明会を行い、研修初日の夜に横浜駅西口からバスで出発、2日目に旧大川小と石巻西高で津波の犠牲者に献花をした後、子どもを亡くした保護者や教師から当時の話を聞き、被災地の住民や高校生と交流を図り、さらに宿舎で防災への理解を深めるための意見交換、DITS(SNSを使用した災害情報投稿システム)の使い方などの研修を行った。最終日は奥松島宮戸島月浜地区の漁師さんに話を聞いた後、海岸の清掃を行い、帰路に就いた。参加した高校生からは、「実際に被災地を見て、被災した方々の話を聞

けて有意義だった」「不自由なく生活できていることに感謝したい」といった感想が寄せられた。

また、8月3日～6日には自然と触れ合う機会の少ない仙台市内の児童養護施設に入所している子どもたちを石巻市網地島に招き、自然体験学習や島の高齢者の人々と交流する「児童養護施設の子どもの交流支援in網地島」を実施した。これは地元の有志が2007年に始めた「網地島ふるさと楽好」がベースとなったものだが、YSVでは2012年からその支援を行っている。今回は大和市在住を含む大学生6名と社会人6名のボランティアも現地入りし、参加した子どもたち約40名の体験学習やイベントのサポート、島民の手伝いなどを行った。

さらに、2018年3月9日には大和市の文化創造拠点シリースで、10日には神奈川県民センターで、震災時に東松島市で被災し、当時の被災状況や今の被災地の様子などを語り伝える活動に取り組んでいる高校生と大学生などを招いて福祉防災講演会を開催した。



児童養護施設の子どもの交流支援をサポート



大学生や社会人が参加し、子どもたちの食事の準備などを手伝った

助成団体: 一般社団法人 やまと災害ボランティアネットワーク <http://ysvn.web.fc2.com>



現地や協力機関とのネットワークを深めながら被災地支援を続ける

マスコミ報道だけでは被災地の現在の状況がなかなか伝わらないのが現状です。今後も被災地の子どもたちやコミュニティと関わり続けながら、未来を担う若い人たちに生の情報を伝えていきたいと思っています。若者には、その力があると信じています。活動を継続するために今回の助成は大いに役立ちました。今後も助成を継続していただければ幸いです。

一般社団法人 やまと災害ボランティアネットワーク
代表理事 市原信行さん